



「ため」が好きだ 堂場瞬一

中抜きとはこういうことか、と思った。私は新聞社に二十六年間籍を置いたのだが、そのうち十年以上は、新聞制作そのものには関わっていない。ちょうどインターネット黎明期に、そちらの仕事をしてきたからだ。

新聞という商品を作って家庭に届けるには、非常に多くの工程が必要だ。①取材②執筆③原稿チェック④印刷（この工程がまた多岐にわたるが省略）⑤配送⑥配達——で、ようやく完結する。

インターネット関連の仕事をしていて驚いたのが、③から⑥までの工程が一切必要なくなったことだ。すなわち、取材・執筆者が自分で直接記事をアップロードすればお終い。「紙に印刷する」という物理的な過程抜きでニュースの配信が成立する。

いくら何でもこれではプロの仕事にならないと、チェック体制だけは整えるようにしたのだが、それでも③のステップが増えただけで、新聞作りよりはるかに手軽なことに変わりはなかった。ああ、これからはやはり、ニュースもこういうやり方が主流になるのか……しかし私はその後、紙に回帰した。言うまでもなく、作家デビューしたからだ。

自分の小説が店頭に並ぶようになって、改めて紙の本が手間のかかる商品であることを意識した。同時にネットの仕事の空疎さのようなものを感じた。「ため」がないままに自分の書いたものが表に出てしまうからだ。正直に言えば、緊張感ゼロである。間違ったら直せばいいし。新聞にも「ため」はあるが、本に比べればずっと少ない。夕刊の場合など、取材してから各家庭に届くまで、数時間しかないことも普通なのだ。

それに比べて、一冊の本が世に出るまでには結構な「ため」がある。原稿を書き、ゲラをチェックし終えて校了になってから、実際に本になるまでには、一か月ぐらいいかかる。こういう期間が、何とも心地好いのだ。ほっとした気分の中で、もうすぐ自分の本が書店に並ぶとい

う昂揚感が高まってくる。

これは紙ならではの魅力だと思う。新聞の場合は即効性が高く（締め切りが迫っている状態をよく、悪い言葉などは承知で「火事場」というが、実感がある）、本の場合ほっとじつくりとした持続性がある感じだろうか。いずれにせよ、デジタルの世界では味わえない感覚だ。

この「ため」の時間に、「一人ではない」という感覚が味わえるのもいい。作家は基本的に、誰にも会わずとも仕事はできる。しかし本が作られる工程に思いを馳せる時、「自分は多くの人と一緒に仕事をしている」と実感できるから、私は紙の本を愛するのかもしれない。孤独に耐えられないと作家にはなれないとよく言われるが、それでも時に寂しさに耐え切れなくなる時もある。

それを救ってくれるのは、紙の本だけなのだ。

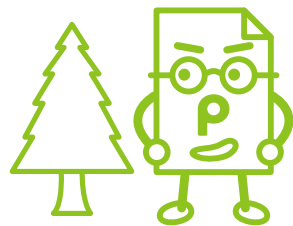


どうば・しゅんいち ●作家。茨城県生まれ。青山学院大学国際政治経済学部卒業。2000年「8年」で第13回小説すばる新人賞受賞。主な著書に「アナザーフェイス」シリーズ、「警視庁犯罪被害者支援課」シリーズ、「警視庁追跡捜査係」シリーズのほか「社長室の冬」、「錯迷」、「犬の報酬」、「黄金の時」など著書多数。

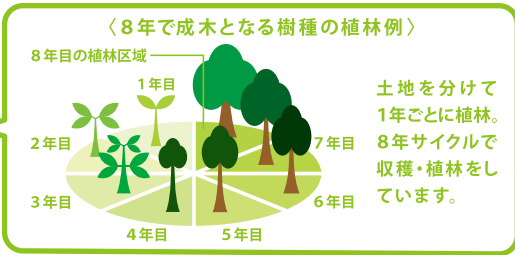
ペーパー君のつ・ぶ・や・き 活動

紙づくりは、「森想い」なんです。

まず植えて→育てて→伐ったら→また植える。植林で森をうまく循環させながら、紙をつくっているんだって。これらの森のほとんどは、もともと使われていない牧草地や荒地だった場所。製紙会社は、自然の森に迷惑をかけないように、森をつくりながら紙をつくっているんです。



紙のことをもっと伝えたい。詳しくは、「ペーパー君のつ・ぶ・や・き」WEBサイトをご覧ください。



<http://kamitsubu.com/>

今回は8月3日号、堀木エリ子さんです。

提供 ● 日本製紙連合会 <http://www.jpa.gr.jp>